

「オロリン」

O R O R I N

公立大学法人島根県立大学広報誌

vol. 9
2018.10

地域と大学の交流誌

p.2-4

成蹊大学 × 島根県立大学
地域おこし協力隊を知る！
合同ゼミ合宿@津和野・吉賀



p.5-7

益田市・津田海岸
海の家「Re:rie」
学生が運営！

津和野&吉賀、地域の魅力と課題を

知る

三泊四日!

八月三日〜六日にかけて、島根県立大学・井上厚史ゼミ一五名と成蹊大学・小田宏信ゼミ一六名による合同合宿が、吉賀町と津和野町で行われました。「地域おこし協力隊」への調査を通じて、地域の魅力と課題を理解し、展望を模索する四日間になりました。

DAY 1



有機野菜の町・柿木村

今回の宿泊地である吉賀町柿木村に到着した学生たちは、まず地域の方々が大切に育てている有機野菜についての講義を聴きました。そのあと、有機野菜の畑や販売所といった現場を見学。さらに、「日本の棚田百選」にも選定されている大井谷地区にも足を運びました。石垣で造られた美しい棚田の風景に、皆思わず写真を撮っていました。



DAY 2

津和野町と地域おこし協力隊

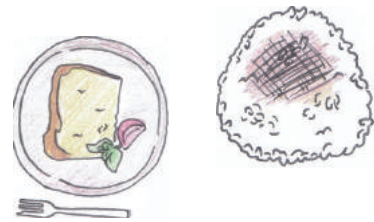
二日目は、津和野町での調査です。津和野町は、都市部から移住して地域支援活動を行う「地域おこし協力隊」を、県内最多の二七名受け入れています。今回の合宿では、教育や農業など多岐に渡る活動を行う津和野町の協力隊員に対して、活動の概要や移住に至った動機などを学生がヒアリングしました。



DAY 3

津和野町長&地域おこし協力隊を迎えた発表会

調査のあと、夜を徹して資料を準備していた各班。発表を聞く津和野町の下森博之町長や地域おこし協力隊の方々の姿に緊張する学生もいました。島根県立大学・清原学長による、「学生の提案はダイヤモンドの原石。ひとつでいいから、光る部分をつくらう」というエールの言葉は、編集部にとっても印象的でした。



優勝は、農業班!

発表会で最優秀賞に選ばれたのは、津和野の産品や柿木村の有機野菜を成蹊大学がある東京・吉祥寺で販売しようというアイデアでした。この班は、前日のヒアリング段階から、地域の方と一緒に自分たちの案を練っていました。両大学の学生と現場とが一緒になって実現できる提案を目指す姿勢に評価が集まりました。



都会から地方へ! 移住した若者たちとの交流

ヒアリングは六班に分かれ、地域おこし協力隊卒業生等を含む十二名に実施。都会から地方へと移住した、自分たちに近い二十〜三十代の隊員との交流は、学生にとって自身の将来を考える上での刺激にもなったようです。「私も地方に移住してみたい」、「自分らしい働き方を模索したい」と語る学生の声もありました。



学生はダイヤモンドの原石!



[イラスト] 古林夕佳 (成蹊大学)



ORORIN

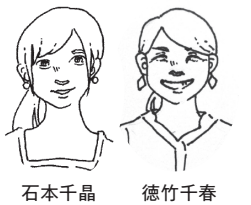
[オロリン]

二〇一七年夏。地域の方々とともに、三人の県大生が古民家を改装して立ち上げた海の家「Reirie」。写真は、今年のサンセット・ライブを撮ったものです。美しい海岸と演奏、集まる方々の姿を見て、編集部も感動しました。

益田市・津田海岸 海の家「Reirie」の挑戦 地域と県大生が「つながる」人と人

成蹊・県大 学生インタビュー！

【編集】石本千晶+徳竹千春
【イラスト】本間千裕



石本千晶 徳竹千春

今回学んだことや、地域おこし協力隊のみなさんと一緒にこれからやってみたいことなど、三泊四日の合宿を両大学の学生六名に振り返ってもらいました！



相良拓進さん

僕たちの班は、最終発表で「起業家フェスティバル」というイベントを提案しました！ 起業してみたい人たちが集まり、津和野町の空き家期間限定の店舗運営を行うというアイデアです。高校生のための下宿事業を運営している地域おこし協力隊OBの方から伺ったお話に影響を受けて、このアイデアが生まれました。

(成蹊大学 3 回生)



古林夕佳さん

今回の合宿で印象に残っているのは、東京から津和野町に移住し、デザイン関係の仕事をなさっている方にインタビューしたこと。いつか都会を離れて暮らしてみたいと考えていたものの、実際に地方に移住するイメージが浮かんでいなかった私にとって、自分らしい働き方をしながら地方で暮らす人の話はとても刺激的でした！

(成蹊大学 3 回生)



高瀬裕太さん

他大学の学生との交流は初めての経験だったので、とにかく新鮮でした！ 取材や話し合いなど、すべての活動を成蹊大学の方々と一緒に行いましたが、考え方や反応するポイントはそれぞれ違っていました。異なる視点を持った都会の大学と地方の大学が、ともに活動することで、面白いアイデアが生まれてくると実感しました。

(島根県立大学 3 回生)



堀田詩織さん

私は地域活性化に興味があったものの、実際に地域で活動している方のごときはよく知りませんでした。今回地域おこし協力隊の方から、「郷土の偉人を研究し、その内容を出版することで地域に貢献したい」というお話を聞きました。今まで考えたこともなかったアイデアを聞いたことが印象に残っています。

(成蹊大学 3 回生)



野村真希さん

地域おこし協力隊の方と一緒に、地域の中学生とグループワークを行うイベントに参加しました。中学生が「新しい社中を作って世界に神楽を広めたい」と大きな夢を率直に語る姿を見たり、初めて出会った成蹊大学の方々と地域課題の解決策を話し合ったりするなかで、自分は自分でいんだと思えるようになりました。

(島根県立大学 3 回生)



半澤侑太さん

津和野町で産直マルシェを開催している地域おこし協力隊の方にお話を伺いました。この取り組みをさらに広げていくために、「両大学が連携して、東京で津和野の野菜を販売する」というアイデアが生まれました。都市生活者の自分も、販路拡大というかたちであれば、地域に貢献できるのではないかと思います。実現に向けて動いていきます！

(成蹊大学 3 回生)

自分自分！

津田海岸を盛り上げたい

海の家「Re:rie」学生代表座談会

海の家「Re:rie」立ち上げたメンバーと、現代表の四人に、海の家や津田海岸に対する思い、運営のやりがいや苦労について聞きました。それぞれ活動に対する熱い思いを語ってくれました。

樋野竜乃介(四回生)、
原大地(四回生)、
山根進也(四回生)、
今村充晴(三回生)
(インタビュー!構成:
中野杏子、瀬下翔太)



●海の家の立ち上げ
——どのような経緯で、海の家の運営に至ったのですか?

樋野 ゼミ活動で、益田市で活動するZOO法人志塾フリースクール理事 長・山本了輔さんと知り合ったことがきっかけです。山本さんは学生時代に海の家を立ち上げた経験をお持ちで、当時の経験などをお伺いするなかで、昨年六月頃にやってみないかと誘われました。

原・山根 僕らは、その後に樋野から一緒にやろうと誘われました。最初は正直乗り気じゃなかったけれど、山本さんと話したら乗せられちゃって(笑)。段々と、自分たちで新しい事業を立ち上げるということにワクワクしてきました!

樋野 物件をお借りすることが決まってから、オープンに至るまでは大変でした。メンバーは三人しかおらず、準備期間が一週間。しかも大学のテスト期間だったので……。

山根 僕は楽しんでいただけ(笑)。途中から地域のみなさんと大学の後輩が手伝ってくれたことも大きかったです。準備の途中で、ご近所へのご挨拶もしたよね。

原 一軒一軒回って行って、全部で五〇軒くらいご挨拶したかな。突然訪ねていったので、最初はびっくりされたこともありましたが、オープン前に交流会をやり、少しずつ自分たちのことが理解されるようになりました。

樋野 保健所の許可がなかなか出なかったり、直前までハラハラしていたのですが、二〇一七年八月五日に正式にオープンして、地域の方々をお呼びしてセレモニーをやりました。そのときは本当に感動しました。

●地域への思いの変化

——地域活動に対する思いに変化はありましたか?

原 はい。正直に言うと、最初は自分たちが楽しむためにやっていたところがありませんでした。変わったきっかけは、昨年サンセットライブを開催した際、いつもお世話になっていらっしゃるちゃんから「君たちが来てくれて良かったよ」と言われたことです。感謝の言葉をいただいて、地域のためにこの活動を続けていきたいと思うようになりました。

山根 僕も活動を続けるうち、津田町が大好きになりました。お隣のおばあちゃんは「君たちがいると寂しくないよ」と言ってくれます。近所の子どもたちも遊びに来てくれます。地域のあたたかさに触れるたびに海岸への思いが強くなっていました。

樋野 昨年冬頃に「来年はやらないの?」という声が地域の方からありました。アンケートを取って見たところ、びっくりするくらいたくさんの方から「来年もやってほしい」という回答がありました。本当に嬉しかったです。地域の方々には、シャワールームを設置

していただいたり、ライブの際に出演者を紹介していただいたり、機材をお借りしたり、立ち上げから今に至るまで、本当にたくさんお世話になってます。これから少しずつ恩返しできたらと思います。

●活動の引き継ぎ

——二代目代表・今村君にも来てもらいました。先輩三人の話を聞いていて、どうですか?

今村 僕は昨年ボランティアスタッフとして関わるなかで、三人が地域の方々との交流を大事にしている姿を見ました。自分の代でも、その点を継承しています。今年は、特に地域の子どもたちとの交流に取り組みたいと思って、海の家で子どもたちに勉強を教える寺子屋のような活動を行いました。

原 メンバーが増えたこともあって、今村は大変なことも多いと思います。僕たち自身も、後輩への引き継ぎをする過程のなかで、組織のマネジメントをもっと勉強しなければいけないなと感じることが多かったです。

山根 今村は後輩たちから選ばれたリーダーということもあって、皆から慕われているよね。地域の方も「いいキャラしてる」って言ってたよ(笑)。

今村 もともと僕はクラスや部活でも人を引っ張っていくタイプじゃなかったのだから……。不安ばかりですが、足りないところもたくさんありますが、周りのメンバーの力に助けられて、なんとか頑張っています。



●海の家とこれから

——最後に、海の家の活動や自分自身のこれからについて、思いを聞かせてください。

山根 愛される海の家になってほしい! 関わる地域の人や学生みんなが、ここを好きになってほしいです。この活動を始めてから、何事も「やればできる」と信じられるようになりました。まだまだこれからですが、そうなると後輩を支援したいと思います。

原 僕は「海の家Re:rie」を始めたことで、事業の運営やビジネスに興味を持つようになりました。他の人にとっても同じように、この場所が、自分のやりたいことに向かって羽ばたいていく足がかりになるといいと思います。



樋野 この活動を始める前は、社会人になることや将来のことを考えると、辛い気持ちになっていました。でも今は違います。大学を出たら一度都会で働いて、島根に戻りたいとポジティブに思うようになりました。将来、この海の家にも戻ってこられるといいなと願っています。

今村 たくさんの方々が海の家を訪れてほしいです。先輩たちのように上手く言葉にできませんが、自分はここに関わって大きく変わりました。「百聞は一見にしかず」ということで、ぜひ遊びに来てください……!



column 1

津田町と海の家 Re:rie



遡ること七〇年前、海水浴場として栄えていた津田海岸。最寄り駅の石見津田駅には、汽車に乗って来た観光客で溢れ返っていた。海の家Re:rieがある並びにも、民宿がたくさんあったという。

「最初は津田町のためなんて考えていなかった」。しかし、地域の方々に支えられながら活動していく中で、津田町に対する愛が深まっていった。——あの頃の津田町を復活させたい。いつしか学生たちはそういう気持ちになっていったという。

海の家Re:rieの由来は、フランス語で「seller」「つなげる」、スペイン語で「re」「笑顔」、この二つの言葉から来ている。七〇年の時を経て、大学生が津田町に溶け込み、地域の方々と協働しながら、再び活気溢れる津田海岸を創り上げていく。取材を通じて、そんな未来が見えた。

(中野杏子)

column 2

瞬間を切り取る — 編集部・徳竹千春に聞く

「取材に行ったときの、今しか聴けない、今しか撮れない緊張感！ その場でリアルを切り取ったり発信したりすることは、難しいけれど楽しいです」。そう語るのは、以前から雑誌を作ってみたいと考えていた徳竹千春。

今回は、インタビュアー兼カメラマンとして取材する機会が多かった。「人を撮ることでカメラが楽しくなったし、カメラを通して人と人に関わることも楽しくなった」。カメラとの向き合い方を見直す機会になったそうだ。

彼女の目標は「雑誌を通して読者に近づくこと」。制作途中の現在、まだ読み手のイメージが湧かないところもあるという。本誌が皆様の手元に届く頃には、彼女の思いが実現していることを期待したい。

(本間千裕)

editors memo: chiharu

好きな雑誌：POPEYE

理由：メンズ向けの雑誌だけど、特集が多様だから。「ハンバーガー」から「二十歳の時何してた？」まで。



● 読者プレゼント

ご意見・ご感想をいただいた皆様の中から抽選で、今号特集にちなみ、津和野 三松堂の「こいの里」を10名様にプレゼントいたします。ご意見は、右記メールアドレスまたはハガキにてお寄せください。



※当選者のお知らせは発送をもってかえさせていただきます。

※応募締め切り／2018年12月27日（木）必着

■応募先 ハガキ 〒697-0016 島根県浜田市野原町 2433-2
島根県立大学企画調整室広報誌オロリン事務局
e-mail kikaku@u-shimane.ac.jp

津和野の和菓子処 三松堂



三松堂 津和野本店／島根県鹿足郡津和野町森村ハ19-5 ☎ 0856-72-0174
三松堂 葉心庵／島根県鹿足郡津和野町後田本町 197 ☎ 0856-72-3225
三松堂 益田店／島根県益田市乙吉町イ 336-7 ☎ 0856-23-6974